

本号の概要

本号は、2007年3月3日(土)に名古屋大学で行われたワークショップ「心理学における質的研究と科学～その包摂と境界」での議論をもとに、各登壇者の発表、ディスカッションでの議論を再構成していただいた原稿に、参加者の一部に寄稿いただいて原稿をまとめたものである。さらに、研究会当日にご参加いただいた井上研さん(名古屋大学 情報科学研究科:科学哲学専攻)、松本友一郎さん(大阪大学 人間科学研究科 組織心理学・社会心理学専攻)にコメント論文を寄稿いただいた。また今尾真弓さん(名古屋大学 医学部 臨床心理学)には、「名古屋にてフィールド研究を語る」というテーマで寄稿いただいた。

第2回研究会の企画内容は下記のものであった。

「心理学における質的研究と科学：その包摂と境界」

日時：2007年3月3日(土) 14時～17時半

場所：名古屋大学 VBL ミーティングルーム

登壇者

(趣旨説明および司会)

松本光太郎(名古屋大学エコトピア科学研究所)

(話題提供)

村上幸史(大阪大学大学院人間科学研究科)

荒川 歩(名古屋大学大学院法学研究科)

(コメンテーター)

伊勢田哲治(名古屋大学大学院情報科学研究科)

サトウタツヤ(立命館大学文学部)

企画趣旨

「君の研究は科学ではない」、そんな言葉を投げつけられ気持ちがふさぎこんだ経験はないだろうか。質的研究が科学であるか否かという議論は、未だに決着していない課題である。そしてこれらの課題に取り組む際には、一つに科学という枠組みをどのように見立てるのか、二つに科学という枠組みにこだわるのか否かという二つの検討の方向性がとり得る。心理学あるいは質的研究は科学であるのか、仮に科学であると考えた場合、その時に想定する科学という枠組みはどのようなものであるのだろうか。また、科学という枠組みにこだわらない場合、心理学あるいは質的研究はどのような知的生産の学問でありうるのだろうか。

本企画は、科学という軸をめぐって質的研究はどの位置にいるのか、もしくは科学という軸は質的研究にとってどのような位置にあるのか、大風呂敷ではあるが、そのような問いについて具体的な実践を基にした話題提供から議論を広げ深めていくことを狙いとしている。

企画の進め方は、まず心理学における質的研究の現状について松本が概略をお話する。次に、村上さんから、「運」を研究することを通じた疑似科学の位置づけに関する話題提供をしていただく。そして、荒川さんからは、社会の要請に対する応答の問題と質的研究が産出する知識の適用方法について話題提供をしていただく。

コメンテーターは、お2人の先生にお願いした。1人目は、『疑似科学と科学の哲学』をはじめ科学哲学・科学社会学に関する著作を公刊し科学の線引き問題に詳しい伊勢田さんから、話題提供を踏まえたうえで、科学全体からみた質的研究の位置づけについてコメントをいただく。2人目に、性格・血液型・知能指数など「科学っぽい」心理学的知に関する著作や心理学のこれまでの軌跡（心理学史）に関する著作を公刊しているサトウさんに、心理学の内部から見た質的研究と科学との関係についてコメントをいただく。

その後、フロアからの反応を含めて議論を深めていきたい。(文責：松本)

主催：てんむすフィールド研究会

共催：ボトムアップ人間関係論の構築(日本学術振興会 人社プロジェクト)